

温古知新③ 菜根譚 5 1

笑顔礼讃西東

信天翁句会 (新潟県・長岡市) 2 3

藤井囀彦 (千葉県・船橋市) 4

中岡昌太 (神奈川県・横浜市) 5

投稿作品 6 8

心に残った作品 9

詠み人スクランブル(入学式の思い出を教えてください) 10 11

お客様の「リレーエッセイ」和田澄子 12

にいがた文化の記憶館便り(1) 13

食楽句案のすすめ(1) 14

ニュースあれこれ 15

詠み人の「リレーエッセイ」歌人目黒哲朗 16

4

April
Vol. 79

*
「喜怒哀楽」は、
文芸を楽しむ方々の
活力の源を目指し
(株)ミューズ・コーポレーション
喜怒哀楽書房が
隔月発行している
情報誌です。

喜怒哀楽

詠み人応援マガジン
詩歌俳柳壇ニュース



質素に人を思う事の大切さを教えてくれた十六項まで前回はご紹介しました。今回は十七項からです。

世を処するに一步を譲るを高しとなす。歩を退くるは即ち歩を進むるの張本なり。人を待つに一分を寛にするはこれ福なり。人を利するは実に己を利するの根基なり。

(人生は一步譲つて生きることがすなわち、自分が進歩することになる。そして、人に寛大に接することが、実益の基となるのである。)

世を蓋うの功労も、一個の矜の字に当たり得ず。天に弥るの罪過も、一個の悔の字に当たり得ず。(一世を風靡するような功績も、それを誇るようでは台無しとなる。天下に渡る大罪も、悔いて反省すれば消えてしまう。)

目先の利益や功罪にとらわれず、先を見据えて何事にも接するのが良いということ。

完名美節は、よろしく独り任ずべからず。些を分ちて人に与え、もつて害を遠ざけ身を全うすべし。辱行汚名は、よろしく全く推すべからず。些を引きて己れに帰し、もつて光を韜み徳を養うべし。

(名誉や忠節を独占してはいけない。他人に分け与えれば、危害を及ぼす者が減る。また、恥辱や汚名を他人に押し付けてはいけない。自分で引

き受ければ、謙虚に人格を磨ける。) 良いことは分かち合い、自らの行動に責任を持つ。良き人生とする基本かもしれません。

事々、個の有余不尽の意思を留むれば、便ち造物も我を忌み嫌うこと能わず、鬼神も我を損すること能わず。若し業は必ず満を求め、功は必ず盈を求むれば、内変を生ぜざれば必ず外憂を召かん。

(気持ちに余裕があれば、何事も嫌われることはなく、天罰を受けることもない。もし、仕事上で業績や名声を求めすぎれば、自他ともに大きな心配事ができてしまう。)

何事もほどほど、中庸が一番!

家庭に個の真仏あり、日用に種の真道あり。人よく誠心和氣、愉色婉言、父母兄弟の間をして、形骸両つながら釈け、意気こもこも流れしめば、調息觀心に勝ること万倍なり。

(家庭には真の仏がいて、日常生活には真の達人がいる。真心から和やかな雰囲気をつくり、にこやかな顔で楽しく語り合い、父母兄弟の間に壁を作らず、気持ちを通わせることができれば、呼吸を調えたり本来の自己を内観することより何万倍も勝る。)

日常生活でしっかりできれば世の達人になれる。でも、私たちはそうでないから、しっかり自分を見つめる時間が必要なのですね…。

普段の生活の大切さ。良きことを分かち、己に責任を持つ。そんな人になりたいものです。

(古川久美子)

あほうどり
信天翁句会 (新潟県
長岡市)

指導 中原道夫様 (銀化主宰)

連絡先 / 恩田富太
Mail: echigoriyoma@gmail.com

去る1月26日(月)、新潟は長岡市にある、これが市役所!!と目を疑うようなモダンでユニークなつくりの「シティホールプラザアオーレ長岡」で開催された第十九回「信天翁句会」にお邪魔しました。

まずはこの信天翁句会の成り立ちから――。

きっかけは、2013年4月27日に開かれた、ある映画の上映会。その映画とは幕末の長岡藩士で信州・伊那地方で最期を遂げた漂泊の俳人、井上井月を描いた作品「ほかいびと」。その後懇親会で、トークショーに招かれた中原さんと、長岡市の若手有志でつくる「越後RYOMA倶楽部」代表の石丸局長が、俳人井月を介してつながった縁なので、長岡で句会を開こうと発案。中原さんには、日曜日の新潟



▲全国にある銀化の支部句会や大会。日本全国、そして海外と俳句行脚の日々です。



市内での句会のあともう一日滞在していただき、毎月第四月曜日にこの信天翁句会が開かれているというわけです。

句会名の「信天翁」は、現代では俳句をたしなむ若者が絶滅危惧種に近く、同じ絶滅危惧種の「あほうどり」にあやかり、少数ながら地道に句作に取り組み、日本文化の伝達者たらんと意を込めているとのこと。

早速翌月の5月26日に第一回の句会が開かれましたが、メンバー全員がずぶの素人。基本的には俳句を「教えない」中原さんによる「俳句の成り立ち」の講義から始まり、メンバーは得難い体験をしたとか。「銀化」メンバーにも運営のサポートに入ってもらい、句会の手を取るに至り、今回が第19回目と相成ったわけです。

投句は3句、うち1句が読み込みで今回は「間」。互選のあと中原さんの普選、大丸の発表、講評と続きます。

炭をつぐ祖父のみぞ知る間合ひかな

堀川

灰になる前に炭を入れないと火が回らなくなる。その間合ひ、連携プレーが祖父は非常に上手だったということ。もちろんこれでもわかるが、上下をひっくり返すだけで意味の通りやすさが違ってくる。祖父のみぞ知る炭をつぐ間合ひかな、とできる。

行間を読み取れぬまま春兆す 敦子
ひとところは空気がよめない人を「RY」と呼んでいたが、手紙などで本当はこう言いたいんだらうなこの人……と行間からにじみ出てくる、ということがある。具体的にはわからないが、冬の間やりとりがあり齟齬があつて、本来は冬の間読み取って解決しておくべきことだったのかも。

寒がりの四温選びて逝かれけり 越野
「逝くんだったら暖かい小春日に逝きたい」つてあの人がよく言つたもんね。寒がりだったから」と、故人を思い出しつつ憫んでいる甲句。

初御籤眉間の皺を増やしけり 織田
推して知るべし、あまりいい内容ではなかった。失せ物は出てこない。恋は成就しない。織田くん今年もまたそうだったの?(笑)

電話の子かまくら造る約束す 堀川
この約束は大人同士ではあり得ない。子どもだとわかるから、子どもは不要。子どもと子どもでもいいし、「かまくら造ったから遊びにきな」と孫と祖父、片方は大人でもいい。電話にてかまくら造る約束す、でいい。

白き屋根にて賀詞交わしたる朝かな
大日方

「昨日はいつぱい降ったねー」というところだが、改造の余地あり。夜中でも雪おろしをしている人はいるし朝は不要。時間帯は勝手に想像させればいい。季重なりになるが、雪おろすついでに賀詞を交わしたる。

百薬の長を備へて冬籠 痴龍

一升瓶を携えてちびりちびりとやろうという魂胆だらうが、らしすぎる句かもしれない。百薬の長を備えて韜晦している、ということ。

針魚湧く波間と波間ぬふやうに 十見

サヨリの表記は、他に針嘴魚、竹魚、細魚、鱈など多くある。尖っている口を針に見立て、波間と波間をその針をもつて縫い合せているとしゃれてみた。「湧く」で、たくさん発生したことを言いたいのだらうが、必要かどうか。しかけが先に見えた。

雪掻いていつの間に来し老いを知る 野水

去年までは感じなかったが今年は違う。忍び寄る老いがわからなかったということ。野水くんの句? まだ20代じゃない、老い先長いよ。痴龍さんなら話はわかるけど(笑)。

シヨール巻く今日はいつこの国の人 敦子

シヨールは冬の季語。「春シヨール」とは面積や材質、質感、色が違う。旅行好きな女性なのでしょう。今日はモスクワ、明日はブタペスト……どの国の人になつているのかと。

佐保姫のお越しあれとや猫間上ぐ 恩田

佐保姫は春の擬人化で、秋の竜田姫

と対になる春のシンボル。室町時代には「佐保姫の春立ちながら尿をして」の句もあり、女性が立ち小便をしていた時代もある。ぐずぐずしてなかなかやつてこない春が、猫間障子からひよっこり来てくれるのでは？ きてくたされや、と誘致している句。

荒木

下は着膨れていないという、アンバランスなところを詠んだ。荒木さん？ 盗撮していないだろうね(笑)。

西脇

初笑い間のよき嘯上げと下げ
下げは「落ち」のことであるが、観客が先に落ちを言ってしまうこともあり、「お客の方に先に言われちゃつて間の悪いやつだなあ」なんていうこともある。これはちょうどいい間合いだったということ。

藤沢

悴めど樽底の糠探りをり
底冷えする寒さのなか、糠もしつかりと冷たい。

金子

棟上の本の香芳し細雪
細雪が一考の余地あり。

◎大丸2句

初明り待たず来たれり日刊紙 藤沢

まだ明るくなつていない、暗いうちに元旦の新聞がどごとと届いたということ。

風花もそはそは彼の来る時間 織田

風花はちらちらと見え隠れするもの。どこかで待ち合わせをしていて、風花を気にしながらも彼がこない。期待感と不安、そういう気持ちがない交ぜになったラブの句。織田くんの句？ 今、男と付き合ってるの(笑)？

◎他の句

冬三月スカイツリーを尖らせり

スカイツリーはかなり詠われていたが、スカイツリーと季語で言葉がほほ満杯。あたかも冬三月がナイフのように、スカイツリーを削り尖らせているという句だが、類想句がたくさんあることを知っておいた方がいい。

悪びれず土間に寝転ぶ冬至南瓜

悪くないが、いつどこで何がどうしてと書かなくともわかる。

歌留多取り茶の間に響く声数多

これも同様。部屋の中でやっているとわかるから茶の間はいらない。

道端に神出鬼没雪達磨

必ず「どこで」を書きたいんだね(笑)。空にある雪だるまの方がむしろおもしろいし、ないとイメージが自由に喚起される。通じるときは書かなくていい、これ原則。その分言葉が使えろ。

これは原則。その分言葉が使えろ。



大寒や身辺捨てるものばかり

大寒は一日のこと。「冬籠」とすればタムとしての期間、日数がでてくる。これでぐんとよくなる。

●質問コーナー

◎職業柄(新聞記者、いつどこでを書きたくないのでありますが…(笑))。

中原/俳句は今、我、ここだから必要ない。5W2Hのような新聞的配慮はいらない。わからないものは、何かイメージするものを示唆すればいい。

◎餅搗くや父祖代代の叩き土間 と

この句の場合は「叩き土間」で家のつくりがわかる。植木鉢や自転車置いてあるのか、由緒ある家なのか、天井の高い家なのか、父祖代代とありこれは必要な土間。

◎懐妊の兆し寒卵を一つの「寒卵」とは…？

中原/冬の代表的な季語で、寒の入り(節分までの寒中に産まれた卵のこと。滋養が高く、日もちもよい。昔、卵を持ち歩くために稲わらで編んだ「つと」を使用していたが、卵の包み方は全世界で色々あつてすごくおもしろい。寒芹は根白草ともいうが、白い根の部分が長く実にうまい。

◎着ぶくれてハレの日ケの日会えない

普段通りの日常が「ケ」の日、祭祀や年中行事などを行う特別な日が「ハレ」の日。民俗学者の柳田國男によって見出された、時間論をともなう日本人の伝統的な世界観のひとつ。20代でわからなくとも、赤っ恥ではないよ。



▲長岡の銘酒「朝日山」の役員もメンバーに。句会後は心ゆくまで喉をうるおします！

★「五・七・五は日本人の遺伝子に刻まれたリズム。他国や多民族でいえば、レゲエやブルースのような私たち独自の文化」という中原さん。紙面の関係で割愛しているが、1つの単語から話が多岐に拡がり、惜しげもなく披露される知識に「へーそうなんだ！」と、少し賢くなったような錯覚を起す。超多忙にもかかわらず、俳句の裾野を広げようという熱意、行動力は俳壇の筆頭格。信天翁は英語ではアルバトロス。ゴルフ用語で使われる場合、ホールインワンより至難の業とされているプレーだ。大きな師と結社の重鎮に見守られ、絶滅危惧種から起死回生、どんどん仲間を増やし増殖、進化してほしいと願っている。(木戸敦子)

藤井 罔彦様

(千葉県・船橋市)

句集『吟雪』

昨年10月に、ご自身4冊目の句集『吟雪』を上梓した藤井罔彦さまをご自宅に訪ね、お話を聞きしました。

Q 句集は4冊目とか

『占春』『滴翠』『歩月』そして『吟雪』と、停年を迎え第一句集を刊行した時から、題名には春夏秋冬の季節感を持つ二字熟語をつけようと考えていた。本書には平成19年〜26年までの291句を収録したが、「狩」入会以来35年の歩みが刻まれた一冊ともいえる。地元高松で小学校教師になり25歳くらいから俳句を作り始めたが、県の推薦もあつて筑波大学附属小学校へ。研究校だから「研究もせずに俳句なんて作って」という雰囲気もあり、俳句は中断



▲「高松から連れてきた(笑)」という奥様と、85歳とは思えない藤井様

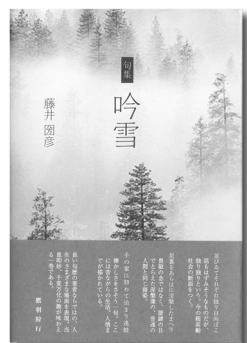
し、以来国語教育研究一筋に34年。47歳のときに全国大学国語教育学会第5回石井賞を受賞したのを機に、翌年から「狩」に入会し本格的に俳句を再開した。

Q 筑附とは名門中の名門、教えることのプロですね

そんなことはないですよ。ただ教え方はある。俳句であれば、575のリズム、季語、切れ字、この3つは基本。授業で「立春」を使つて作りましょう、とやるがこれではだめ。季語をどう活かして俳句の中に折りこむかが大事であつて、季語ありきではない。例えば長野に行き、山が多いから「山登り」で作りなさいはおかしい。それでは感動がない。乗鞍が見えた、穂高も見えた、という感動のあとに何の季語を幹旋するか。そこに「鯉のぼり」とつけた。「乗鞍が見え穂高見え鯉のぼり」。安曇野の雄大な風景に鯉のぼりが入ること、山の麓で暮らす人たちの生活が見え、5月の季節感。季語を入れるというのはそういうこと。575の世界がぼつと広がる。何を表現したいかを、最初にしっかりと出させて耕しておく。大人の場合も同様。そこを踏まえて指導すれば、俳句の本当のおもしろさばかり長く続く。

Q 藤井先生につきたいですね(笑)

「狩」の支部のほか、千葉大学で俳句を教える先生の指導もしている。その中で特に感じるのが国語教育は言葉の教育であり、言葉の力を身につけるといふこと。表現と理解の問題になるが「読む」と「書く」は文字言葉、「聞く」と「話す」は話し言葉。「読む」と「聞



▲『吟雪』とは「雪を見ながら詩を口ずさむ」の意で孟郊の漢詩から拝借

く」は理解、「話す」と「書く」は表現。言語活動の面から見るとそれ全体が言葉。言葉で対象を描き出す文芸、記す記録、述べる説明・報告、伝える手紙文、それらの力をつけなさいと。伝える力をつけるために手紙を書かせ。俳句と同様に手紙も踏まえないければいけない形式がある。オレオレ詐欺じゃないが、お金を送つてという手紙を書いて送らなければ何にもならない。貸してくれる様に書ける技術をつけなさい。能力技術。言葉とは書く技術、読む技術、話す技術であり、技術をどう身につけるかということ。

Q 早くに聞いておきたかったです

一年生に「何がいるの?」と聞くと「キリン」「キリンは何をしているの?」「歩いてる」「はいよくできました」。僕はね、いや待てよと。「歩いてる」では正答にならない。歩くとはどういうことか。一年生にわからせなきゃいけないと50年も前、一所懸命考えた(笑)。動物園でいろんな動物が歩いているところや、赤ちゃんからおばあちゃんまで歩くところを8ミリで撮つて子どもたちに見せた。「これ何の映画だろう?」「動物園」。そのうちにわかつてきて「みんな歩いている!」と。歩き方は全部違うが、こつちからこつちへ足を運んでいくことが歩くことだと理解でき

る。そこをわかっているだけで2〜4年の学習がずいぶんかわつてくる。

Q 逆立ちには?

逆立ちがダメだね(笑)。手だから歩くことにならない。足を使つて体重を移動してAからBに動くこと、それで初めて「歩く」という言語を理解する。こういう授業をしていた。「おかあさん」を辞書で調べると「おとうさんではない親」と書いてある。それではわかつたことにならない。100メートル走るも、走り方、細かい技術によつて早くなる。読む、書く能力もそう。技術が身につくと書けるようになっていく。俳句はそのなかの「描く」というところに入る。自分の生き方や生活など、今後何を描くか。その技術を、今後も伝え続けたいと思つている。

『吟雪』より

ひれふして春待てる草踏まずゆく
白壁に二人の影を置き良夜
裸木や一仕事せし自負に立ち

★話にどんどん引き込まれ、気が付くといとまごいをしなければいけない時間。早く聞いておけば随分と違つていたかと思う話が数多。能力とは技術なのか。「根本から話す」と何時間もかかるよ」「教え方によつて子どもの伸びが違うから教育研究は楽しかった」という藤井さん。明瞭、適切、実直でユーモアがあつて一所懸命。天職といえる「教えること、引き出すこと」の恩恵をより多くの方が享受するため、ますます活躍くださることを願つて止みません。(木戸敦子)

中岡昌太様

(神奈川県・横浜市)

『中岡昌太朱夏作品句評集』

去る3月6日、昨年11月に朱夏叢書第9篇として『中岡昌太 朱夏作品句評集』を出版した中岡昌太さんにお話をお聞きしました。

駅構内の喫茶店でお会いした中岡さん。手には「出がけ」にポストに入っていたので持ってきた」という、俳句四協会が編纂し2667句を収録した『東日本大震災を詠む』(3月6日発売)の分厚い一冊が。一緒に本を繰っていくと、もちろん中岡さんの俳句も収録されている。

Q 変わらずに俳句漬けの毎日ですか？

神奈川県現代俳句協会の句会や吟行会に研究会、「未来図」や「朱夏」の句会、それに他流試合で他の結社に顔を出したりと、毎日のように出ていたが、年齢とともに少なくなってきた。俳句の基本は吟行だが、散文ものを見てきたので、80歳を超え、今までの経



▲「俳句は麻薬。難産なほど快感は増す」と笑う中岡さん

験を活かして俳句を作ればいいかなと思っている。俳人の故三橋敏雄も、かつて「今からものを見たってしようがない」と言っていたことも背中を押している。だから今は、どちらかというところから入るようになった。日頃気になった言葉をメモしておいて、そこからイメージを広げ、過去の蓄積と言葉とが触発していく作り方をしている。

Q この度の『中岡昌太 朱夏作品句評集』も？

前回、御社から出版した『梟のいる場所』は、「未来図」を中心に「未来図」「朱夏」の作品は含まれていない。昨年「朱夏」の20周年記念の年で、酒井弘司主宰に勧められたこともあり、いい機会だと捉えた。句集も視野にあったが、「朱夏」同人として参加したのが47号から116号までなので、1号5句で単純に計算して345句しかない。少なくとも500句くらいから選句しないといひ句集は生まれないと判断し、作品句評集という形をとった。

Q 評判もよく愛読者カードでの感想も多く寄せられました

ハンディな大きさを、持ち歩くのにちょうどいいとよく言われた(笑)。新書判の大きさや厚さは、詩人辻征夫の『貨物船句集』が、表紙の黒地に白文字は、芸林書房の『齋藤慎爾句集』が念頭にあった。本書に「好きな句を3句選んでください」というアンケートをつけたが、一番票の多かった句は「いきいきと水のでてゆく春の山」。わかりやすい句なのだと思うが、自分としては「飛花落花だれから先に風になる」や

「哀しみのよくみえてくるカシオペア」のような心象句を作りたい。俳句は作り手と読み手の合作。読み手にゆだねればよいことだから、ある程度の飛躍があつた方がいろいろ読み方ができ、拡がりができる。575で句ができて、決まり切った解釈をされるのではないかと思うと、もうひとひねり加える。

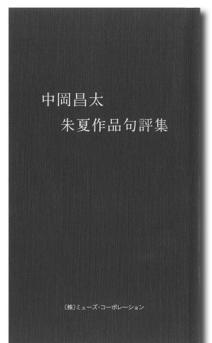
Q 時間をかけるのですね

ええ、推敲派。句はパソコンに入力するので、まず検索して類想類句を排除し、それから言葉をつけ足したり、並べ替えたり。出たところ勝負ではなく、とことん手直しをする。「未来図」の支部や地域のサークルで指導をしているので、毎月80句位にコメントを書いて送る、といった添削も何年とやっている。贈ってくださる句集は全部目を通し、A4で3〜5枚の感想を書かないと気が済まない(笑)。

Q 自身のこれからは？

年齢相応の句を作ればよいという意見もあるが、酒井主宰は「老いという言葉はきらい。絶対に年とつた句は作りたくない」とおっしゃる。私も考え直して「老い」という言葉を使わず、安住することなく、常に新鮮さを保ちたいと思っている。だから若い人の句集を読むのは楽しみのひとつ。

あとは、作家論、評論を書きたい。以前、西東三鬼や寺山修司と中村草田



▲「作品一覧」付きなのも親切な配慮。小さいながらも重みのある一冊

男の関係を書いたが、作品としてはおもしろいが評論になっていない、とのコメントをいただいた。具体的には、ほとんど知られていないと思うが、高柳重信の弟子で1990年に55歳で亡くなった新聞記者、折笠美秋について書きたいと思っている。

そのためにはまず健康第一。今、週2回トレーニングに行つて2時間は鍛えている。長いことヨガや健康体操の指導員をしていた女房も一緒に行くところ、そんなやり方じゃ効果ないわよ！」と、うるさくてね(笑)。

『中岡昌太朱夏作品句評集』より

中岡昌太さんの俳句には、どこか土俗的な匂いがする。それは故郷、秋田県の地霊か。

ぶれず、自らの立ち位置から地球を眺望している。 — 酒井弘司

ぎこぎことは人は働き雁渡る

風舐めるキリンの舌よ春を待つ
雲のなきことの不安よ被爆の日

★8年前、お話をお聞きした際に「師も大事、連衆も大事だが、俳句は自分に始まり自分に終るもの。これからもこの言葉の意味を追求し続けます」と語っていた中岡さん。自然の中で育まれた感性と本来の地頭を元手にたゆまぬ努力を重ね、今がある。時に振り返ることはあっても、止まってははいけな、ということの中岡さんの今のありようが語っていた。(木戸敦子)

川柳

- 1 腹が立つ歯の浮く世辞に頼ゆるむ
関本 守(新潟県)
- 2 花が散つたら青い夢見る
松田重信(埼玉県)
- 3 長靴で捺印をする雪の道
丸山芳夫(東京都)
- 4 ここだけの話と言えば耳が寄り
石原 岳(群馬県)
- 5 喜怒哀楽わが家のタマに隠せない
橋本世紀男(東京都)
- 6 言いたきを耐えて呑み込む処世術
藤沢健二(千葉県)
- 7 窓開けて窓いっぱい春入れる
小山恵美子(大阪府)
- 8 しがみつく気持ち解るが勇気出せ
細川光子(栃木県)
- 9 人間のモラルを捨ててゆく戦争
岡本邦子(福岡県)
- 10 真央ちゃんが飛ぶから私掛け声を
佐伯セツ子(香川県)
- 11 そよ風に誘われては春の恋
大橋絵代(千葉県)
- 12 謎の字を忘れて暮す老い一人
鈴木義雄(福島県)
- 13 あけましてオカメ・ヒヨットコ笑ろうてや
奥那於子(大阪府)
- 14 一日は早いものです頑張ろう
松田義登(福岡県)
- 15 ざりチョコのふりしてゐるのに気づかない
高橋久仁子(福岡県)
- 16 キャンプ地に往年の名手大挙する
高松秋良(群馬県)
- 17 九条で武力行使は止めたのに
守屋高雄(岩手県)
- 18 ときめきを抑え濃いめの紅をさす
近藤富夫(東京都)

- 19 つぶやきがめつくりふえた共白髪
大久保アヤ子(東京都)
- 20 ねじ山を潰してからの定年後
目黒豊光(福島県)
- 21 夕食を風が伝える換気扇
森 恒雄(愛知県)
- 22 そして孫トコロ天だね人の世は
山口千鶴子(東京都)
- 23 読み返す喜怒哀楽の自分の句
奥田音野(香川県)
- 24 まつり事ばかり盛んな政
土谷敏雄(秋田県)
- 25 祖父は言う軍部報に似てきたなあ
原 崇雄(埼玉県)
- 26 六法全書本箱の中で欠伸する
大江秋月(兵庫県)
- 27 親少し越え孫それを越えてゆけ
竹村穂夫(大阪府)
- 28 マンホールうすいの意味をやっと知る
中林恵子(大阪府)
- 29 女子会が盛んコンパニオンは男
高柳閑雲(愛知県)
- 30 飽食の海で思考が溺死する
鏡たか子(山形県)
- 31 子供らを鑄型にはめてイエスマン
伊藤敬子(宮城県)
- 32 悪く見え思わぬのにお宝へ
大木和男(東京都)
- 33 妻の古希子供が企むサプライズ
後藤すえひろ(福岡県)
- 34 王手飛車孫に突かれて苦笑い
三宅得三(新潟県)
- 35 宝物本人以外すべてゴミ
山崎一嘉(愛媛県)
- 36 ワンコインこれならいける俺おる
和崎治人(山口県)
- 37 歳老いて趣味に夢中の今が春
福地義雄(沖縄県)

俳句

- 38 出会いから一生の友と気付く運
野田明夢(新潟県)
- 39 次は核で究極的な平和主義
富高くにひろ(埼玉県)
- 40 白鳥とゐて我忘る真昼かな
有坂馨園(福島県)
- 41 孫にこわれ折紙にて鶴を折る
松涛千鶴子(東京都)
- 42 佛前にわらび餅供えおり
田野倉訓郎(東京都)
- 43 神職より届く賀状や旧正月
津田忠彦(岡山県)
- 44 群れ咲いて空の青さや犬ふぐり
井上静夫(栃木県)
- 45 しんかんと和紙漉く里の芽立ちかな
城山憲三(愛知県)
- 46 鶴唳や湿原の朝動き初む
川口 襄(埼玉県)
- 47 梅生ける見事な鉢捌きかな
濱田イサオ(福岡県)
- 48 浅草や非番の夫と針供養
吉里ひとみ(東京都)
- 49 若き日の三畳暮らしや「窓の雪」
松尾らん(東京都)
- 50 独り居のミニひな飾る嬸かな
塚田寿子(埼玉県)
- 51 風花を舞はせ小舟の漁佳境
林 克(福島県)
- 52 お葉漬や納屋の凍樽佐久平
三津木俊幸(千葉県)
- 53 遠雷や橋の向こうは市街戦
加用章勝(千葉県)
- 54 黙深し声の一刺冬の百舌
上村元義(神奈川県)
- 55 昼火事のテロ来たごとく凍戻る
星 一子(神奈川県)

- 56 白梅の枝つたひくる雨雫
神 一男(静岡県)
- 57 やらひたる鬼の気配の真闇かな
澤 雅子(大阪府)
- 58 燃え盛る火種も尽きて久女の忌
浦橋渴雪(兵庫県)
- 59 少女等の声巻き込みし春一番
小澤円梨(静岡県)
- 60 春は立つ変哲もなき人の情
福岡 悟(東京都)
- 61 昼ごはんうな重二人夫婦の日
花塚三郎(千葉県)
- 62 雲一つなき街道や菜の花忌
関原幸子(東京都)
- 63 我も唄ふ「一ねんせいになつたら」
阿部 至(埼玉県)
- 64 山頭火の南無句如来や初霰
岩村 昇(神奈川県)
- 65 虫メガネ持ててセンター試験解く
湯浅芳郎(岡山県)
- 66 初当尾サイレン長く正午告ぐ
居原田連星(大阪府)
- 67 老木になほ咲く力梅の花
堅田秀子(東京都)
- 68 余生まだ覚たる窓の紅梅と
大塚徳子(埼玉県)
- 69 抜きん出るえぞ富士凜々し春がすみ
堀田寿美子(北海道)
- 70 春立つや和菓子の色のうすみどり
阿部徳夫(宮城県)
- 71 凡一字座右の銘なり老いの春
山田楽山(埼玉県)
- 72 初みくじ大吉うれし八十路の運
阿部幸子(宮城県)
- 73 新緑やわが魂に香を焚き
阿部澄江(宮城県)
- 74 日やけなどせかせてやまぬ畳替
千代田俳徒(東京都)

- 75 「多喜二へのレクイエム」しみいる二月
 富樫和子(山形県)
- 76 母折りし紙のひひなの皺伸ばす
 近藤薫也(千葉県)
- 77 子にはない孫抱く気楽山笑ふ
 長峰正晴(千葉県)
- 78 亀鳴くや無沙汰の友の良き便り
 竹本美美子(新潟県)
- 79 死は一度寒の水にも金魚生き
 佐野和彦(静岡県)
- 80 ガラガラ音追う瞳春立つ日
 黒田康子(大阪府)
- 81 春禽の私語こそばゆてこそばゆて
 棕本望生(大阪府)
- 82 立春のはずみ心や花舗に佇つ
 堀木和子(大阪府)
- 83 春雪の枝から望む芽ぶきかな
 須澤重雄(長野県)
- 84 パン屑を撒いて友達寒雀
 山崎吉晴(群馬県)
- 85 茗荷竹季七色に香りをり
 内河邦久(東京都)
- 86 行き過ぎて臘梅の香に振り返る
 片山茂子(埼玉県)
- 87 春寒し背幅に余るランドセル
 渡邊碧海(静岡県)
- 88 春の波ひねもす平和招く音
 大橋恒次(新潟県)
- 89 太陽の恵みしみじみ寒明ける
 井原穂子(東京都)
- 90 軒つらら日暮れは風が研ぎに来る
 青木日出男(群馬県)
- 91 亀鳴くやしかと存問承る
 炭崎 博(滋賀県)
- 92 母の手に匂ひ残り桜餅
 古谷 力(東京都)
- 93 雨降つて止んで一足つつの春
 羽根田明(神奈川県)
- 94 木洩れ日ゆらめき落ちる春の雪
 杉村美保子(岩手県)
- 95 鈴なりの合格絵馬や梅香る
 大内泰子(東京都)
- 96 二人して伊勢参宮のバスツアー
 檜山とり子(東京都)
- 97 潮の香の届く掛茶屋吊し雛
 三ツ木宗一(東京都)
- 98 凜という床しきことば梅ひらく
 大谷 茂(埼玉県)
- 99 活花や煮のころやなぎ添えて観る
 西條公雄(埼玉県)
- 100 針箱の母の指貫春寒し
 石井美智子(埼玉県)
- 101 八十の夫と撒く豆腐願ふ
 山本直子(大阪府)
- 102 たんぽぽや外野はもつと声を出せ
 長谷川正(東京都)
- 103 幾度も外を覗かず雪の果
 重原 昇(新潟県)
- 104 噴き上げて絵になる山よ春動く
 坪田勝秀(鹿児島県)
- 105 冬校後楽園の句を拾ふ
 松嶋光秋(東京都)
- 106 庭園のかすかな裂け目春隣
 野村牟人(東京都)
- 107 あけぼのの雲なき富士や芽吹山
 清まさじ(静岡県)
- 108 梅の木にメジロがチュツチュ春が来る
 針生 清(千葉県)
- 109 ふるさとは深雪の底か露の臺
 小泉和明(茨城県)
- 110 料峭や時打つ鐘の音近く
 青木ケン子(埼玉県)
- 111 禍々しきニュースは絶えず春寒し
 長野光康(神奈川県)
- 112 墨堤に子規も住みけり桜餅
 石尾曠師朗(東京都)
- 113 山畑の潤ふ恵春時雨
 杉原明子(静岡県)
- 114 淡き日も儲け物なり越の春
 水落重式(新潟県)
- 115 早春賦胸にころがし誕生日
 渡邊 清(宮城県)
- 116 総領の家を守りて鬼は外
 岡野智恵子(埼玉県)
- 117 記憶練り姉泣き笑い黄水仙
 望月よし江(埼玉県)
- 118 墓の水汲めば餅しほととぎす
 田中 昶(鳥取県)
- 119 寒風に鼻ヒクつかすネズミかな
 白戸麻奈(東京都)
- 120 今日だけは口をへの字に鬼やらい
 岩田 信(神奈川県)
- 121 蝌蚪生る此処は地獄の一丁目
 緑川禎男(埼玉県)
- 122 春うらら猫にも老眼あるさうな
 二瓶邦枝(埼玉県)
- 123 人生は長き道程花大根
 道給一恵(埼玉県)
- 124 切らば切れ吊し鮫鱈の薄笑い
 吉村充治(埼玉県)
- 125 妻入院雪降りやまずふりやまぬ
 浅野信廣(宮城県)
- 126 茶花にと買い求めたり桃の花
 鈴木みえ(長野県)
- 127 梅林の蕾大きくふくらみぬ
 柳澤京子(宮城県)
- 128 少年のボール飛び込む春の庭
 菅原茂子(宮城県)
- 129 母と娘の声間違ひし初電話
 成田節子(山形県)
- 130 おみなごも鬼になりたる追儺かな
 渡辺由美子(宮城県)
- 131 反骨の菅原文太枇杷の花
 中野勝子(鹿児島県)
- 132 冬日向古着を友へひとまとめ
 有田裕子(北海道)
- 133 生かされて利己主義もよし春めけり
 天野輝子(東京都)
- 134 聖書手に師の来る白き日曜日
 寺内 侖(埼玉県)
- 135 嶺よりの風のかたさや蜆舟
 一瀬正子(埼玉県)
- 136 山茶花を散らしてすずめ飛び立ちぬ
 沖 惇子(大阪府)
- 137 花咲きぬソメイコヒガン山ザクラ
 森 俊彦(神奈川県)
- 138 笑ふかに山羊が鳴きけり春うらら
 田中美智子(埼玉県)
- 139 初音告ぐ声の明るく今日はじまる
 長谷部喜代子(大阪府)
- 140 庭木立根方に春の兆し見ゆ
 田中恵美子(山形県)
- 141 白鷺の水平にゆく梅日和
 中嶋清子(佐賀県)
- 142 春一番髪振り乱し妻帰る
 古川正栄(千葉県)
- 143 下萌や復元水車廻りそむ
 中田文子(大阪府)
- 144 娘と住める路地の軒下葱の花
 服部八重子(東京都)
- 145 春の雷生れぬ一句に飯焦す
 菅原キイ子(宮城県)
- 146 立春や静かに物の立ち上る
 岡村君枝(茨城県)
- 147 郷愁のやぐら炬燵談義かな
 池田 岬(埼玉県)
- 148 大声と小さな声の鬼は外
 松前邦広(千葉県)
- 149 散る花の前で指切り風眩し
 山本理香(大阪府)
- 150 春立つや小枝に鳥のじゃれ合つて
 鷺谷浅子(茨城県)

- 151 針供養優しき言葉掛け納む
堀井酔人(茨城県)
- 152 産土や湯の香と露の臺が好き
黒石正子(埼玉県)
- 153 明日へと信じて冬木の芽
邑橋節夫(兵庫県)
- 154 教え子の賀状の写真五人の名
中村康浩(福岡県)
- 155 寒鯛や時化乗り越えし背光る
伊藤やゑ(東京都)
- 156 山鳩の声重苦し幼き日
木下 精(大阪府)
- 157 会釈されふと戸惑えりマスク人
高橋まさ子(宮城県)
- 158 日脚伸ふと言へば肯ふ人と居て
高瀬秀嘉(静岡県)
- 159 春立やお地藏さんの眼のゆるみ
北野耕兵(千葉県)
- 160 虎落笛今だに郷が恋しくて
宮本幸子(埼玉県)
- 161 春めくや雲も散歩を始めたる
今井勝子(新潟県)
- 162 錦鯉春の光に華やぎぬ
青木涼子(埼玉県)
- 163 凍滝の内なる音色深山晴
岡村イト子(東京都)
- 164 波枕夢見し妣や伊勢参
福田和子(東京都)
- 165 日だまりの狭庭にすつと石路坊主
磯部 力(新潟県)
- 166 種袋振る音空が吸いあげる
岩崎政弘(岡山県)
- 167 綻びの糸そのままに古代雛
小林七重(新潟県)
- 168 大納言てふ盆梅のあたり続べ
西川孝子(奈良県)
- 169 震災も風雪も越えさくらかな
鮫島茂利(兵庫県)
-
- 170 冬草の逞しさ欲しみとり妻
大阿久雅子(埼玉県)
- 171 雛段に三日続きの余震かな
高崎登喜子(東京都)
- 172 囀りや母の睡りの浅くして
川嶋法子(東京都)
- 173 カンガルーの親子と話す日永かな
井田由利子(宮城県)
- 174 朝がすみ港出てゆくいさり舟
鈴木清子(埼玉県)
- 175 山独活の除染聞きたし露天市
菅井文男(新潟県)
- 176 四月から代る先生ほほえみを
齊藤安弘(神奈川県)
- 177 回廊を行けば涅槃の迎へ鐘
浜田はるみ(埼玉県)
- 178 酒が好き目刺二本の至福かな
村山徳英(埼玉県)
- 179 立春はわが誕生日生さること
中山日出子(大阪府)
- 180 遣り残し一つに纏め二月尽
田野井一夫(栃木県)
- 181 春に向け清気止めない沢の水
杉本敬治(愛知県)
- 182 薄氷も生きるちからでありにけり
鈴木岑夫(千葉県)
- 183 咳ひとつ寂寥感あり冬の夜
井上氣海(広島県)
- 184 枇杷の花そつと手触れて結実待つ
中村和弘(愛知県)
- 185 突発に句友の逝きて雪しまく
小林春雪(新潟県)
- 186 焼夷弾浴びるし夜の桃の花
増本和子(大阪府)
- 187 豆を撒く幼児の仕草鬼も笑む
木村 舳(山形県)
- 188 過去に蓋未来明るく生きてゆく
林 玉子(長野県)
-
- 189 梅まつり紅白きそう羽根本にて
五味田幸夫(神奈川県)
- 190 梅開く昨日ふたあつ今日二十
仁藤ひろじ(埼玉県)
- 191 東風吹かば強く生きるも夫の声
勝田久美(大阪府)
- 192 君からの一杯のコーヒ―春待ちぬ
中川義彦(新潟県)
- 193 耳にはさむ鉛筆雛明り射す
高杉杜詩花(北海道)
- 194 教え子の気高さに酔う春の宵
坂元正憲(東京都)
- 195 フクシマよ残存という重き冬
中岡昌太(神奈川県)
- 196 宗次郎のオカリナを聞く冬星座
山崎鶴恵(鹿児島県)
- 197 春風や感謝でつづる遺言状
大窪美代子(大阪府)
- 198 空めくつてもめくつても雪みちのくは
鈴木蝶次(宮城県)
- 199 やはらかに光集めり桃の花
若月理依子(新潟県)
- 200 ひなまつり老健よりも帰ってくる
宇田川正雄(埼玉県)
- 201 下萌の声を拾うて二歩三歩
高垣勝代(大阪府)
- 202 夕せまり徒遍路待ちて渡し舟
金子範子(高知県)
- 203 啓蟄やコンテナ並ぶ基地相模
佐藤 信(神奈川県)
- 204 雛の間過ぎし日語る昼さがり
駒場京子(神奈川県)
- 205 観音の指しなやかに春兆す
宮宅芳子(岡山県)
- 206 山桜愛でる脳裡や学徒兵
永井俊樹(兵庫県)
- 207 春障子鳥影舞へば我も又
増田公代(東京都)
-
- 208 みそか日の名残り雪を惜しみけり
小山羊子(新潟県)
- 209 笹舟を追ひかけきれず春の川
梶 鴻風(北海道)
- 210 花菜漬変哲さんのハーモニカ
小島岳青(新潟県)
- 211 黙禱で始まる五十年目のクラス会
白松一良(千葉県)
- 212 籠りゐて二十日ばかりを見ぬ庭の葉
の無き茎にバラの実ふつ
塩澤倫子(神奈川県)
- 213 節分は升を抱へて豆を撒く面をかぶれ
るヘルパー目かけ 今井忠一(東京都)
- 214 坪庭を三十年ぶり模様がえわが老體
は若くはならじ 高須 孝(愛知県)
- 215 うつくしまと美称ほこれる福島にも
どし下されほんとうの空
黒澤正行(福島県)
- 216 春の水すくわんとしてみず際の吾子
はまるごとひかりの器
北岡 晃(兵庫県)
- 217 農は国の基いと教わり育てられいま耕
放地累累とあり 藤原昭三(滋賀県)
- 218 昔駅わが人生をたふとべば帰郷の朝
を洗ふ春雨 安部 哲(新潟県)
- 219 チャン群れる根室半島陽の落ちて千
鳥恋しと乱のアイヌは
早坂紘司(北海道)
- 220 人は悪愚かなことの繰返し戦争お
こし理窟云い合う 北澤実夫(東京都)
- 221 しんきろう幻影漁り火曼珠しゃ華螢の
光霜月のつもった粉雪墓地の赤土五才
の頃の里山の昔話 梅澤鳳舞(埼玉県)
- 222 おのずから時雨にぬれて散る紅葉音
なきままに地に還りゆく
野木宗信(奈良県)

223 東から君の朗報寄せてくる春の潮の香りのごとく 土屋喜雄(山梨県)
 224 南薩のおおらかな夕日を仰みつつ西方浄土古き人思ふ 濱崎祥子(鹿児島県)
 225 波の背に揺られて還る兵もいた祖国の土を踏み締めるため 寒川靖子(香川県)
 226 孫の写メ送られ来れば比べ見る五子生れし頃のアルバム広げ

227 田も畑も雪一色に化粧する四季おりおりに姿うるわし 高橋登志子(新潟県)
 228 健康で傘寿の祝い戴きて逝かれし友等偲びいるとき 田中豊恵(新潟県)
 229 いにしへの西行のご遺かまほし桜ほろ散るおぼろ月夜に 久本にい地(岡山県)
 230 わが孫がバイバイと手を振るこのわれも笑顔となりて手を振り返す 小暮昭司(群馬県)

231 十代に罪悪はびこり不整脈「捨てられた」社会大人への警鐘 西山悌三郎(高知県)
 232 離れ住む名前ばかりの夫なれど孤独とさげば心重たく 岩崎令子(大阪府)
 233 旅はるか「どこから」「どこへ」地図上に難民の群辺境の民 合田浩子(茨城県)

234 今は亡き父母の面影重なりておぼろに見ゆる春霞 渡部美代子(山形県)
 235 風雪に耐へて永らへ喜寿迎ふ共に祝はんクラス会にて 下山信行(群馬県)
 236 稽古日は朝からちがう孫の声袴姿にうれしさあふれ 大鳥居牧子(東京都)
 237 神おはす滝のすがしき滝壺にしぶきをあびて身は冷えとほる

238 日向ほこ小犬と共に寄り添ひて何時しか愛犬寝息をたてをり 西山知子(岡山県)

2月号の心に残った作品

「投稿作品で心に残ったものは？」の問いに、たくさんのお返をお寄せ頂きありがとうございました！その中で特に多くの評価を集めた作品とそれを選んだ理由の一部をご紹介します。

◎俳句部門

74年賀状だけのつながり五十年

長峰正晴(千葉県)



長峰正晴様

・私もそんな人がいるなど共感しました 針生清(千葉県)・年賀状だけのつながりでも心が通じている 大久保アヤ子(東京都)・今年書く年賀状が五十年になる教え子(失礼)がいます。共感。この糸はなににつながっているのだろうか 中村康浩(福岡県)ほか

【自句自解】

毎年の年賀状の中には学生時代以来会っていない友がいる。かれこれ五十年近くなるが、距離的事情等から会う機会がなく、又今後会うこともないかもしれぬ。だからといって時々会っている友と気持ちの上での距離感にまったく差はない。年賀状は互いの消息を確認し合えなくてすまないと思う心を埋め合わせてくれるもの。学生時代以来五十年近く会っていない友との年賀状だけのつながりを、今後も大事にしていきたいと思う。

◎短歌部門

188 何ひとつ昨日と変わることもなくも身の引き締る元旦の朝

山田良男(埼玉県)

・元旦の朝は一日違いですがすがしい朝を感じる 松尾正一(岩手県)・年の始



山田良男様

めですもの皆こうあって欲しいものですが：田中豊恵(新潟県)・毎年生かされてる喜びを実感する年始の気持ちに同感 岩崎令子(大阪府)

【自句自解】

作歌の原点を考えてみると、「日常のひとコマに意味をつけること」と歌人の冲ななも氏が述べています。拙歌は大晦日から元旦への生活詠です。上の句の「何ひとつ昨日と変わることもなくも」の客観性と、「身の引き締る元旦の朝」の主観性を軸とした一首です。年齢を重ねるほど、年末の喧騒と年始の静寂、そして、天地に遍く満ちる淑気(じゆき)に自分自身を置く心地と置かれた立場を自覚するものです。それが結句の「元旦の朝」です。

◎川柳部門

216 ああ極楽母も言うてた寒の風呂

小山恵美子(大阪府)



小山恵美子様

・寒の風呂はご馳走と言う。当に身も心も至福の一時である 西條公雄(埼玉県)・冬の楽しみのひとつは、あつたまるお風呂です。湯舟につかった瞬間のひとこと。奥那於子(大阪府)ほか

【自句自解】

年を重ねたせいでしょうか、寒い冬冷えた体を、特にハイキングや又精神的に疲れた日は薬用入浴剤など入れ湯舟に浸かると思わず「あ、極楽 極楽」と口に出してしまう自分に、そう言えば母も気持ち良さそうによく口にしていたなあ

と思いを馳せ、懐かしく母を偲んで出来た句です。この度は選句頂き凄く嬉しいです。ありがとうございました。

《俳句》

47 老いたればそのお洒落や初鏡 阿部澄江(宮城県)

・これまでは多忙で化粧することもままならなかった。これからの余生は私自身のもの。明るく生きようとする力が垣間見える 城山憲三(愛知県)・こんな姿勢が長生きの秘訣でしょうね 坪田勝秀(鹿児島県)ほか

《短歌》

191 核すべて絶対悪とわれ思ふ広島・長崎・福島の惨 黒澤正行(福島県)

・うたわれているこの通り。ただ自分ではなかなか31文字の中に織り込めなかった。羨望の思いでいただきました 塩澤倫子(神奈川県)ほか

《川柳》

217 湯湯婆と読むおかしさの八十路婆 大久保アヤ子(東京都)

・思わず笑いました。石原 岳(群馬県)・「湯湯婆」という字を初めて知りました 細川光子(栃木県)・湯湯婆の当て字と八十路婆の対比がうまい 土谷敏雄(秋田県)ほか

《他にも》

6 首かしげ話聴く犬春隣 大谷 茂(埼玉県)

7 遠き日の父の一喝丸火鉢 一瀬正子(埼玉県)

21 減反はせぬとの覚悟冬田打つ 湯浅芳郎(岡山県)

111 頼らるうちが幸せ毛糸編む 田中美智子(埼玉県)

※今後ふるってご投稿をお願いいたします！

前回のアンケート

Q: 入学式の思い出を教えてください。

(「自分でも、お子さんの思い出でも」※紙幅の関係上、すべてのお答えを掲載できませんことをお詫び申し上げます。)



★小学校、国民学校

- ・ランドセルは珍しくほとんど白い布製の肩かけカバン。ランドセルをうらやましがられた 石原 岳(群馬県)
- ・ハンカチ大の名札をつけて制服白えり紺サージの洋服で 神 一男(静岡県)
- ・先生とお友達とさくらの首かざりを作った事 小澤円梨(静岡県)
- ・入学式の写真。傍らで母が何か言い、小生も何か言っているところをパチリ 居原田連星(大阪府)
- ・四人姉妹の末娘で、おさがりが多い中ランドセルだけは新しく父が名前を書いてくれた 堅田秀子(東京都)
- ・前日に転んでしまい目の横にはんそうこうを貼って出席 阿部澄江(宮城県)
- ・「前の田んぼで前田先生」と担任の先生の名前を一生懸命覚えた小学校入学式の帰り道 黒田康子(大阪府)
- ・桜満開の校門までの道を母と一緒に歩いたこと 岡野智恵子(埼玉県)
- ・式典中に空襲警報発令。何としても忘れられない 三ッ木宗一(東京都)
- ・母が都合でどうしても休めず同じ小学校の教員になった姉が出席してくれた 山本直子(大阪府)

- ・幼いころはまだ寒くて体育館でブル震えておりました 坪田勝秀(鹿児島県)
- ・戦争中なので物不足、入学写真もなぐ。担任の先生が戦地へ行った 高松秋良(群馬県)
- ・厚い国防色の布を手縫いしてくれた母手づくりのランドセル。花の刺しゅうがうれしくて 望月よし江(埼玉県)
- ・子供ながらにきりりと歩いて行った 岩田 信(神奈川県)
- ・シャイだったので、嬉しさよりも不安で押しつぶされそうだった 有島和子(東京都)
- ・両親でなく若き叔父が付添った 緑川禎男(埼玉県)
- ・12才上の姉が連れて行ってくれた 二瓶邦枝(埼玉県)
- ・先輩が寄ってくれて学校までいった 松尾正一(岩手県)
- ・知人の革屋さんでランドセルを調達してもらいました 鈴木みえ(長野県)
- ・役場から通知が来ましたが学校に行くくと張り紙に名前がないので母はあわてたそうです 成田節子(山形県)
- ・おじさんが靴職人だったので入学祝に皮靴を作ってくれた 中野勝子(鹿児島県)
- ・帽子を無くして泣いて帰ったこと 古川正栄(千葉県)
- ・赤飯炊いて母がお祝いしてくれました 中田文子(大阪府)
- ・農作業の合い間に顔を出してくれた母を見つめ嬉しかった事 竹村穂夫(大阪府)

- ・父の戦死した年でした。母は私の入学用の写真を早く撮って父に送ったそうです 黒岩正子(埼玉県)
- ・式が終わり親と別れて教室へ入った時の心細さを思い出す 中林恵子(大阪府)
- ・メリヤスの着物にお下がりの茶色の袴。母の傍でじっとしていました 鏡たか子(山形県)
- ・長女で下は弟二人なのでランドセルが黒でした。赤色のランドセルがほしかった 福田和子(東京都)
- ・入学間近になっても「鏡文字」の直らない私。式前日は母の特訓を受けました 小林七重(新潟県)
- ・セーラー服、ツメ襟でない金ボタンの学ラン、母達はみんな着物。ワカメちゃんカツオ君ヘアースタイル 藤橋一葉(新潟県)
- ・家庭や友人のことを問われたが手を上げること出来ず、帰宅時「学校に行かない」と駄々をこねた 菅井文男(新潟県)
- ・お母さんたちがみなそろって前髪をあげて黒い羽織を着ていた。私は赤いワンピースでした 若月理依子(新潟県)
- ・後ろに立っている母が心配で式の間中、泣いていました 山崎鶴恵(鹿児島県)



- ・母が生涯で一番嬉しかったことは長女の私が小学校へ入学した時といつも云っていた 中山日出子(大阪府)
 - ・入学記念写真は大きな桜の木の下でだったと思います。空襲で失いました 土田京子(東京都)
 - ・終戦の昭和二十一年入学式でした。行けない友もたくさんいました 渡部美代子(山形県)
 - ・書いた自分の名前が枠からはずれて困った顔をしていたら先生に大きくて元気が良いですねとほめられた 大鳥居牧子(東京都)
- ★中学校
- ・だぶだぶの中一の制服姿を見る毎に「春」を感じる日です 田野倉訓郎(東京都)
 - ・岩手の中学校の分校での素足の冷たさは忘れられません 林 克(福島県)
 - ・校歌にある「桜吹雪を身に浴びて」の入学式 橋本世紀男(東京都)
 - ・学校はすべて焼け池袋の護国寺の階段でモンペ・セーラー服とりどりでした 井原毬子(東京都)
 - ・中学生になった息子の制服姿に大いなる期待を寄せたこと 大谷 茂(埼玉県)
 - ・周りにいる子が皆自分より賢く見えて緊張していた 杉本敬治(愛知県)
 - ・町の学校に転校し、言葉が違った 小山羊子(新潟県)
- ★高校、大学
- ・制服の買えない貧しさに母の有り合わせの洋服(私は男性)で入学 有坂馨園(福島県)

A Q U E S T I O N N A I R E

「海に陸に赫々たる戦果、一億国民が感激を禁じ得ないこの佳き年に入学を許され」と読んだ宣誓文。

塩澤倫子(神奈川県)

自分の力で高校だけは出ておこうと思ひ、19才で入学した夜学の入学式

井上静夫(栃木県)

大学の入学式で角帽をかぶった応援団が校歌を声高らかに歌われた

花塚三郎(千葉県)

大学の入学式、挨拶する人が遠くに見え、人の多さにびつくり

長峰正晴(千葉県)

高校の入学式に母と二人でお花見に城山へ登った

細川光子(栃木県)

親の反対を押し切つての高校進学、学帽学服カバンは全て中学生の時のまま。当時は恥ずかしくて辛かった

山崎吉晴(群馬県)

校門から100mも続く桜並木が印象的

長野光康(神奈川県)

幼稚園から中学まで一緒だった幼なじみと大学の入学式で偶然出会ったこと

浅野信廣(宮城県)

憧れの高校の制服を着ての入学式に出られた事

田野井一夫(栃木県)

校歌がとても印象的

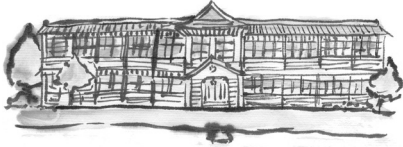
佐藤 信(神奈川県)

あこがれの女子高に入学出来て先輩たちの歌う校歌の声の美しさにうっとりしました

渡辺由美子(宮城県)

田舎つべのコチコチの私に同じ姓ね！と声をかけてくれた人。今も親友です

一瀬正子(埼玉県)



大学の入学式。小学校のとき転校した友人が全学部代表の入学の誓いをして感心した

邑橋節夫(兵庫県)

大学入学式の故荒木俊馬総長の訓示

高柳閑雲(愛知県)

女子校の入学式。空襲におびえながら

増本和子(大阪府)

★子、孫

志望校に入った孫娘の満面の笑み

息子の大学の入学式に出席したいと思つていたのに学生運動が烈しくて取りやめに

澤 雅子(大阪府)

娘の子の受験シーズンで合格を祈つています

高須 孝(愛知県)

赤いランドセルの長女が白い李の咲く坂道を下っていく姿が印象的

土屋喜雄(山梨県)

孫娘の小学校入学式で「一ねんせいになつたら」を斉唱したこと

阿部 至(埼玉県)

長女の小学校入学式で私の同級生の男児と同じ小学校で顔を合せ、親子で同級生になりびつくりした

堀田寿美子(北海道)

子供の入学式はいつも着物で母に来てもらつて着付けてもらいました

小山恵美子(大阪府)

二人の子の入学式全部が単身赴任中…残念なことと恨まれ事ばかりが…

近藤薫也(千葉県)

長女の担任となる先生が高校の同級生と知り驚きました

堀本和子(大阪府)

長女の中学入学式は大雨でしたが新調した大島紬を着ました

岡本邦子(福岡県)



子供二人の入学式(大学)に夫婦で出席した

杉村美保子(岩手県)

ダブダブの制服・制帽を着て、重い大きいランドセルにふりまわされていた姿

奥那於子(大阪府)

内気な孫が大きな声で返事ができてうれしかった

関原幸子(東京都)

長女の小学校入学の日が雪でした。玄関で白をバックに記念撮影

目黒豊光(福島県)

孫の入学式。ほとんど夫婦全員がビデオカメラを持っているのに驚き

寺内 侖(埼玉県)

子供が一年生に入学した日、担任の先生が美人と喜んだこと

中嶋清子(佐賀県)

満開の桜門をくぐつた長男の入学式

濱崎祥子(鹿児島県)

次男が中学生となり全新生を代表して入学の言葉を読み上げた時

岡村君枝(茨城県)

息子がやっと入れた高校の光景が思い出される

池田 岬(埼玉県)

息子の入学式はいつもより念入りにお化粧をしました

山本理香(大阪府)

子供は四人(男二人、女二人)妻が連れて行きました

大江秋月(兵庫県)

近所の御婦人の方達と「ハオリ」を着て、正装して出かけた

高橋登志子(新潟県)

次男の小学校入学で、長男のおさがりを着せた時に「おふるの人いるかない」と目答して入学式の前日の吾子

桑原謙一(群馬県)

喘息で成長が遅かった娘が無事に入学を迎えた時は感無量

川嶋法子(東京都)

次女は幼稚園に行かず小学校に入学。彼女の何でも新鮮に感じた熱き思いは今尚、私共親の胸によみがえります

井田由利子(宮城県)

息子のランドセルが遠くなるのをいつも観ておりました

小暮昭司(群馬県)

★その他

黒澤正行(福島県)

長靴をはき日本刀を下げた軍人のいたのを覚えている。その年の十二月開戦。

大橋恒次(新潟県)

四十歳で晩学の通信制高校入学式。甦る青春に緊張した

北岡 晃(兵庫県)

入園式で「はい」という返事ができてうれしかった

久本にい地(岡山県)

島に勤めていた時、たった一人の入学を迎えた

後藤すえひろ(福岡県)

胃病で伏してた父が入学式に母と共に出席してくれた

和崎治人(山口県)

やっぱり桜花の咲き具合が大切です。体育館の寒さを思い出します

浅海和代(東京都)

桜が咲きはじめ花びらに細雪がかかって、美しいのしい学校生活を思いました

星 一子(神奈川県)

教員であつたので卒業式のために涙

梶 鴻風(北海道)

我子の入学式より孫らの入園入学は嬉しいもの

星 一子(神奈川県)

第40回目の今回は、黒川道彦さまよりバトンを託された和田澄子さま。
自身の住んでいる土地に縁のある文化人の足跡を訪ね、文章に残す。
同じ土地にいた人の営みに触れることで、その土地にも人生にも、より愛着がわく気がします。

●お客様の『リレーエッセイ』

泉鏡花と神楽坂

和田澄子

(東京都・新宿区)

一と里は神楽に明けて神楽坂 玉も覺も朝霞
柳の軒橋梅の門 桃と桜が名を並べ
江戸川近き春の水 山吹の里遠からず
筑士の松に藤咲けば ゆかりの君を仰ぐぞえ
牡丹屋敷の紅は袂に 恋には心あやめ草
ちまき参らす玉つさも いっそ人目の関口なれど
漲るばかり滝津瀬の思いを誰か防げむ
蚊帳にも通へ飛ぶ虫 忍に濡れよ青簾
いつも逢坂軽子坂 重荷も嬉し肴町
その芝看意地張は たとひ火の中水の底
船で首尾よく揚場から 霧の灯に道行の
互いの姿しのべども 靡きもつるる萩薄
色に露添ふ御縁日 毘沙門様は守り神
袂にほのめきて 結ばる胸の霜とけて
空も小春の街並や 雁の翼のかけひなた
比翼の紋こそ嬉しけれ



これは泉鏡花が大正十四年三月の文芸春秋に「神楽坂の唄——清元のつもり——」と題して発表したものです。これには節がつけられ、当地の花柳会では今も唄い継がれているとの事です。

先日この歌詩をたまたま目にする機会があり、私の居住地区にある神楽坂周辺の地名や風物などが盛り沢山に読み込まれていることに興味を覚え、鏡花と神楽坂とのゆかりを訪ねてみました。

鏡花は明治六年に、彫金師の父と葛野流大鼓・能楽師の一族(ちなみに俳人の松本たかし氏もこの家系の娘である江戸育ちの美しい母、すゞとの間に金沢市で生まれました。

幼時より母所蔵の草双紙等々の書物に親しみ、土地の昔話を聞くことが大好きな子供でした。しかし、十才の時に最愛の母を亡くしました。そしてこの事が後の鏡花の生涯と文学に深い影響を残したと言われています。

十五才でキリスト教系の北陸英和学校を退学し、金沢専門学校を受験しましたが、数学不得手のため不合格となりました。この頃から貸本などで多くの小説を耽読し、特に十七才の時に読んだ尾崎紅葉の『二人此丘尼色懺悔』その他に感激。自身も制作意欲が高まり二、三の作品を試作し、小説家志望の念に燃えました。

十八才で紅葉の門下を目指して上京を果たします。しかしすぐにはその機を得られず、一年あまりを友人知人を頼り、豆腐屋ばかりで何日も過ぐすという日々で鏡花の生涯でも、最も苦勞の多かった時期でした。

紅葉の縁者と知り合い、その伝を頼って、十九才の明治二十四年十月、牛込横寺町に初めて紅葉を訪ねました。志を述べると鏡花の文才を見抜いたのでしょいか、即門下生たる事を許され、翌日から尾崎家の玄關番として住み込むことが出来ました。そしてこれが、鏡花と牛込神楽坂との出会いの日ともなりました。

紅葉は「硯友社」を興し、雑誌『我楽多文庫』を発行、横寺の家を十千万堂と号して、多くの作品をここで著しました。又鏡花をはじめ、多くの作家の修業の場ともなりました。現在は「尾崎紅葉旧居跡」として新宿区の史跡に指定されています。

紅葉宅で約四年間を過ごす間、鏡花は原稿の清書から新割り、風揚げの付き合ひまで、師に献身的に尽くしました。又、鏡花の初期の作品はすべて紅葉の添削を経ていたと言われるほど、師としても、弟子を世に出すための努力を惜しまなかつたようです。

二十三才の時に、新進作家としての地歩を固めた鏡花は、師の家を出て三年ほど小石川に居を移しました。

二十六才の正月、硯友社の新年会で神楽坂の芸妓

桃太郎と出会い、深い愛情で結ばれました。ちなみに彼女の本名は、伊藤すゞといひ鏡花の亡き母と同名でした。これは全くの偶然の一致だったのでしようか、それとも名前そのものも愛情の一部分だったのでしようか。これを機に牛込南榎町に転居し、彼女とも三年ほどは自立たぬように付き合っていたようです。

鏡花にとつて、明治三十六年(三十一才)は人生の転機ともいえる慌しい年でした。神楽坂二丁目に転居して、すゞとの同棲生活を始めました。

(ここは東京物理学校(現東京理科大学)の裏手で学生の声や講義も聞こえてきたそうです(ちなみに夏目漱石も学生時代に早稲田から神楽坂、この学校の傍を歩いて通学していました。小説『坊ちゃん』の中で坊ちゃんはこの学校を卒業した事になっています)。

しかしこの事が死期の迫っていた師紅葉の知るところとなり、「若い身空で芸者などを家に入れるとは何事か」と病床に呼び付けられて大叱責を受け、泣く泣くすゞは鏡花の家を去りました。

小説・芝居等でよく知られている「婦系図」お蔭と主税の別れには、この体験が取り入れられている事は周知の事実です。しかし小説と違って実際の二人は紅葉没後に再び結ばれ、三年ほどの新婚時代をこの神楽坂の家で過ごしました。

若き日に暮らした合計十年ほどの「牛込神楽坂」は鏡花にとつて、文学修業と同時に終生の愛をはぐくんだ、大切な土地であったと思います。

この後、麴町、番町と居を移し、昭和十四年に六十七才で生涯を閉じるまで、代表作『高野聖』『歌行燈』『婦系図』をはじめ、全三百六編の作品を残しました。文学者としての業績は周知の事実ですが、私生活でも、三十七年に及ぶ人も羨む夫婦生活を送りました。

亡くなる数日前、夫人が自宅に咲いた露草を一茎摘んで、病床の鏡花に見せたところ、大変賞美したそうです。

枕頭の手帳に走り書きで

露草や赤のまんまもなつかしき

と書かれたものが、絶筆となりました。

新潟日報メディアシップ 5階
〒950-0088 新潟市中央区万代3-1-1
TEL:025-250-7171 FAX:025-250-7040
メディアシップは「新潟日報」の本社機能を有する高層ビル。
帆船のかたちを模して、信濃川にかかる萬代橋のたもとにあります。

にいがた
文化の記憶館
便り(1)

「にいがたの歌と音楽」

秋岡 啓子

はじめまして。今号から連載の場をいただきました。「にいがた文化の記憶館」の秋岡と申します。短歌、俳句を愛好されている方々には、新潟の文化人といえは、たとえば良寛さま(出雲崎町)や、會津八一(新潟市)、相馬御風(糸魚川市)、または宮柊二(魚沼市)などがよく知られているかと思えます。また近代詩の分野では、堀口大學(長岡市)、西脇順三郎(小千谷市)もいます。当館では、このような近現代日本の文化を担った人物を相関図で示し、新潟人の活躍の記憶を分かりやすく伝えていきます。この連載では、開催中の企画展示のテーマをもとに、人物をピックアップしてご紹介したいと思います。第1回のテーマは「にいがたの歌と音楽」です。



▲秋岡啓子さん(左から2人目) ぜひお訪ねください

さて、3月に北陸新幹線が開通しましたが、県内停車駅の発車メロディーには新潟出身者の作った歌が採用されています。上越妙高駅の唱歌「夏は来ぬ」(小山作之助作曲)と、糸魚川駅の童謡「春よ来い」(相馬御風作詞)です。上越市出身の小山作之助(1864~1927年)は、文部省音楽取調掛(現東京藝大音楽学部)を出て、日本で最初の正式な音楽の先生となりました。教え子に「荒城の月」などで有名な滝廉太郎がいます。詩人または良寛研究者として知られる相馬御風(1883~1950年)は、作詞家

としても500曲以上の詞を残しています。最初の作品は、母校・早稲田大学の校歌(作曲は東儀鉄笛)。「都の西北 早稲田の森に」の歌い出しと、最後の「わせた、わせた」のエンル部分は日本でもっとも有名な校歌といっても過言ではないでしょう。校歌作詞は生涯に200篇近くあり、北海道から九州まで全国に残っています。また、恩師・島村抱月と合作し、中山晋平が作曲した「カチューシャの唄」は、日本の「流行歌」第1号といわれています。1914(大正3)年、芸術座第3回公演「復活」の劇中で松井須磨子が歌った「カチューシャかわいやわかれのつらさ」というフレーズは、当時の流行語にもなりました。

その北陸新幹線ですが、関西に繋げるルートが3案あり、うち2案では琵琶湖の周囲を通るようになっていきます。1971(昭和46)年、加藤登紀子さんが歌って大ヒットした「琵琶湖周航の歌」の原曲を作ったのも、実は新潟市出身の人物です。もともとこの歌は、1917(大正6)年に旧制三高(現京大)ボート部員が琵琶湖周航の途中、湖畔の宿で歌詞をつけて歌ったものでしたが、長らく作曲者は不明でした。やがて、当時の雑誌「音楽界」に掲載され、若者の間で口ずさまれていた「ひつじくさ」がその原曲であると判明したものの、「作曲家・吉田千秋」に関しては謎のまま。1993(平成5)年になつてようやく、滋賀県今津町(現高島市)が「琵琶湖周航の歌」開示75周年事業として千秋の消息を尋ねる記事を新聞に載せたところ、その正体が明らかになりました。吉田千秋とは、「大日本地名辞書」の編纂や世阿弥発見などの業績を持つ吉田東伍(阿賀野市)の息子で、幼いときから音楽の他にも植物学、天文学、語学などで才能を発揮しながら24歳で夭折した人物だったので。他にも新潟には、「佐渡おけさ」の村田文蔵や、歌謡曲の分野で活躍した遠藤実、三波春夫などがいます。

【企画展示情報】
「にいがたの歌と音楽」
● 4月14日(火)~5月31日(日)まで。
● 月曜休館、ただし5月4日は開館し5月7日休館。
● 毎月第4土曜日14時から解説会あり。
● お問い合わせは 電話 025-250-7171



▲吉田千秋



▲相馬御風



▲小山作之助

今回からの新コーナー「食楽句楽のすすめ」の執筆者・岩田桂さんは、岐阜県生まれ、新潟市在住の元大手企業の企画マン。畑を耕し、俳句の主宰をつとめ「食楽句楽」を実践しつつ人生のセカンドステージを満喫されています。食と俳句とのコラボレーション、当意即妙のエッセイをご賞味ください。

謎の薇狩り

岩田 桂

薇採りに参加する機会がやってきました。場所は奥美濃の山間部です。茎の先が「の」の字にくるんと丸まっている薇は、山地の湿った所に群生して早春に芽を出します。灰汁抜きをして天日に干し保存します。

油揚げとの炒め物や煮つけ、和え物は山菜料理の王様と言われています。小料理屋だと小鉢に入り、驚くほどの高い値段がついてきます。数が少ないので、山菜界の金鉱といわれる代物だからです。

奥美濃の薇群れるひとところ

しかしこのゼンマイ狩り（山菜狩り）には、次のような恐ろしき人間の業が付きます。まず山菜と聞くと、大抵の人は、ナンンだあ〜山菜か、ゼンマイと聞くと、ナンンだあ〜ゼンマイかと小ばかにします。これが大きな間違いの始まりです。小ばかにする人間ほど、ゼンマイ狩りの恐ろしさを知る羽目になるのです。



そのような人は取りあえず、ゼンマイ狩りの渦中に放り込むに限りません。「何も言うな!」とハイキング感覚で山間の現場に連れ出すことにします。ゼンマイのありそうな谷間に入ると、まず鶯の声が聞こえてきます。しかもぐるっと見回すと、三六〇度すべて新緑世界の大パノラマです。ここまで来ると、懐疑的だった小ばか人間も、やつと山菜採りのモードに入りかけます。「この新緑を絵に描くとしたら、五〇種類の緑の絵の具が必要だろうな!」などと、にわか画人になります。

さて一息ついてから、いよいよゼンマイ狩りの始まりです。「あーあそこにゼンマイが!」と、まずは先輩らしく指をさします。嫌々ながらついて来た小ばか人間が、それを慣れない手つきで根元から折り採ります。もちろん、まだまだゼンマイなんてと、半信半疑です。そのゼンマイ一本がもたらす、人間の業の深さを知る由はありません。

その後、一本また一本とゼンマイは採られていきます。その度に彼の腰の籠にはゼンマイが確実に増え、重さも加わっていきます。この実感がたまた

なくなりません。

腰籠のぜんまい重くなほ進む

そして気が付くと夢中になりすぎて、周りに誰もいない、たった一人の自分自身を発見します。他のメンバーもそれぞれの秘境を目指しているのです。

声を時々かけ合つて、位置を確認していたはずが、ゼンマイが見つかる度に急に押し黙り始めて、とうとう一人ぼっちになったのです。

こうなると引き返そうか、いやこの先五メートルを進めば、またゼンマイの群生があるかも知れないと思うともう引き返せなくなります。もう少しだけ進んでみよう。

そしてもう少しだけとキリがなくなっています。まるで山姥が山の上手から手招きして、「おいで! さあさあ! こちらにおいで!」と小ばか人間を誘き出しているようです。

山姥が薄目あけたり蕨狩

こうなると「新潟で五十八歳の山菜採りが行方不明…」等という新聞記事が、チャリと脳裏を過ぎるが、もうゼンマイを稼ぐ喜びが止まらない状況です。

四〇本摘めば、さらに五〇本欲しくなる。一〇〇本になれば更に二〇〇本欲しくなる。このようにして、最初は「十本も採れば良いや」と思っていた人間が約変して、人間の限らない欲望の魔界に入り込んでいきます。

おお! 何という業の深さよ! 新大陸発見のゴロンブスも、おそらくこうであつたのだろうか。ボくら人間の業の深さが、ゼンマイ狩りから思い知らされる瞬間です。

この深き業はまず、一本のゼンマイを手に入れた瞬間から始まりました。そして命からがら下山してきた小ばか人間は、つくづく思いました。「今日の、あの、秘密の場所は、誰にも教えないぞ!」と、硬く口を閉ざすのであります。

薇の萌ゆる秘境を閉ざしけり

へトへトになった薇採りの後は、山姥に向かって苦いビールで乾杯です。うっ、このビールは苦い。



詠み人のリレーエッセイ『TsumuGU』 新潟県内書店にお目見え!



本誌「喜怒哀楽」誌上で2007年2月号から2011年12月号までの5年間にわたり、「詠み人のエッセイ」(P16参照)として紡いできた10名の俳人のエッセイ合計30篇が『TsumuGU』として、昨年12月に本になりました。



▲新潟万代店ではレジのすぐ前に!!

新潟県内では、「TSUTAYA」8店舗において(新潟万代店、新潟中央インター店、新潟通店、長岡新保店、長岡アクロスプラザ店、長岡市古正寺店、六日町店、上越インター店)、3月中旬～6月中旬までの3カ月間販売されます。お近くにお住まいの方は、ぜひお手にとってご覧ください。



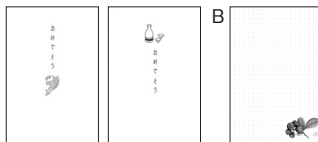
▲4月5日(日)「新潟日報」の書評欄「にいがたの一冊」

また、4月5日(日)「新潟日報」の書評欄「にいがたの一冊」にも、取り上げていただきました。

オリジナルポストカード2種を好評発売中!

ご好評をいただいている当社オリジナルポストカード。同封のアンケート用紙にご希望の種類、セット数を明記のうえ、**必要金額分の切手を同封のうえ封書にてお申し込みください。**

- A 活版印刷(おめでとう:鯛・とっくり各3枚計6枚入り1000円)
- B 季節のポストカード(今回は夏バージョンより「ブルーベリー」を同封8枚入り500円)



第14回方代の里なかみち短歌大会開催

去る3月7日(日)、甲府市中道交流センターにて約100名の参加を得て「第14回方代の里なかみち短歌大会」が開催されました。



現在の甲府市右左口町に生まれた望郷の歌人山崎方代の心に触れ、より多くの方に短歌に親しんでもらいたいと始まった本大会も今回で14回目。全国43都道府県より、一般の部は約1000首、小・中・高校のジュニアの部は約2000首の応募がありました。授賞式後には選者の講評があり、3時間の大会は盛会のうちに終了しました。

- 文部科学大臣賞 一般の部
見上ぐればレンブラントの光さすここは甲州芸術の森 茶屋 淳子
- 文部科学大臣賞 ジュニアの部
夕涼み家族みんなの笑顔咲く緑豊かの風土記の丘に 小田切 萌
- 山梨県知事賞
エゾウサギの切手を貼って届けようこの世の外のやさしき姉に 遠藤ひとみ
- 山梨県教育委員長賞
靴箱を開けると中にラブレターりんご顔してポケットの中へ 岸本 葉奈
- 甲府市長賞
増税がなければ知らずにいたろう二円切手のエゾユキウサギ 横井 和幸
- 甲府市教育長賞
頑張って早く履きたいトウシューズ練習励む小さなプリマ 望月 美希

スタッフの一言

Q. 入学式の思い出といえば? ※新潟県の花チューリップとともに撮影



小学2年時の新1年生の入学式。式の途中で突如先生に呼ばれ「忘れていた、すぐにこの挨拶を覚え言ってくれ」。ふふ完璧だ!と思ったが最後に「1年生代表〇〇敦子」と。今思い出しても冷汗が出ません!



大学の入学式で、真赤な髪のお姉さん発見!大学生ってこんなにも自由か、と思ったものです。そんな私も数年後には金髪に……。いろんなものへの入口だったのかも知れません。



小学校の入学式。両親に「好きなものを」と言ってもらい選んだ真っ赤なランドセルを、得意になってしょって行きました。買ってもらったものに、あんなにときめいていたことが、懐かしい。



最後に入学式に出席したのは、次男の高校の入学式。お母さんの知り合いも少なく、クラスも別々だったので次男も母の私の方が心細くなってしまいました。新潟の入学式はいつも花冷えのする寒い思い出が多いです。



専門学校(美容)の入学式です。色とりどりの髪、派手なファッションにビックリしました。そして今年長男の小学校入学式!思い出に残る式になるといいな☆



小学校入学式の写真。叔母にピンクのスーツを作ってもらい真新しいランドセルをしょって、得意満面の笑顔で気取ったポーズ。だがその頃から詰めが甘く、ひどい寝癖の前髪に気づいていない。



娘の高校の入学式が印象に残っています。高等学校の入学式ですので知っている人が少なく、校長先生の話を聞いていましたが勉強のことばかり言っていて、大変な学校に入学したんだなあというのを憶えています。



それは小学校入学式…昭和40年代後半、女の子は白いタイツをはくのが定番。私はタイツを嫌で気分は盛り上がり…だって何で白いのか。さらに膝にしわが入るのも口惜しく、ブルーな気持ちで写真撮影しました。



小学校入学式のとき真っ赤なブレザーを着せられて嫌だった事を思い出します。さらに友達に張り切ってる雰囲気にならなかったな〜とか今もその光景が目には浮かびます。そんな切ない幼な心を癒してくれた桜!今でも桜を見ると癒されます。



今春から黄色バッチを付けて年少さんへ進級しました!Wピース!!3歳7ヶ月



「実感」を与える

前回のカセットテープの話から、もう一つ思い出したこと。私は長野県の中学校の教諭として勤務している。年間、生徒と共に心を熱くし、落胆もすれば心しびれる感動を味わうこともあるのが合唱コンクールである。他の学級と合唱曲を作り上げ、練り上げる。自信と緊張、仲間との励まし合いを感じ合いながら、学級の生徒が壇上に登っていくのを見つめる瞬間は何とも言えない喜びが体を奔る。

今から十年前に担当した学級の合唱コンクールに向けた取り組みのことを懐かしく思い返す。音取りや細部の技術的な指導は音楽科の教諭が授業で指導するものの、その他の多くの練習時間は学級に任せられている。そこにどうやって生徒のモチベーションを高めていくか、言ってみれば学級担任の指導の腕の見せ所である。音の強弱、息継ぎ、男女のバランス：私はその合唱曲の指導法を調べ、書き出して教室に掲示し、朝夕の窓辺に生徒と共に声を出して歌った。歌い終わってはより良くなったところ、更に改善を求めたい箇所を語り合った。渡り廊下で歌い、昇降口で歌い、もっと度胸を付けねばと職員室に子どもらを引き連れて歌った。「優秀賞」の表彰を思い描き、金の色紙を貼り広げた賞状の台紙までもあらかじめ作って教室の壁に高く掲げた。

クラスの合唱曲は「小さな協奏曲」という曲であった。YouTubeで検索するとヒットする音源があるので是非お聴き

目黒哲朗

カセットテープから起因した前回の「切実」と今回の「実感」と。余韻と、含蓄のある内容と合唱曲の歌詞に胸がチリチリしたのは、同年代ゆえでしょうか、戻らない日々への追想からでしょうか。

いただきたい。少し長くなるがその歌詞をここに引いてみる。

カセットテープが音をなくしても 回っている
今日という日が一緒に巻かれていく

まぶたの裏の空が晴れています 風が吹いています

プールサイドの黄色いタオル すみこの君のインシヤル

水に映る影 あの時君の笑い声 音のないテープの向こうに

いち日が いち日が もうすぐ巻ききる

合唱曲「小さな協奏曲」より

結局、賞は取れないままにコンクールは終わった。生徒は歌い終わった後の達成感を笑顔のうちに見せていた。でも、全てが終わってしまったその後で、私はやっと、やっと気がついたのだ。CDやMDのデジタルメディアで音楽を聴くことが当たり前になった時代、すでに子どもたちはカセットテープで音楽を聴いた経験など全くもっていなかったのである。歌の技術ばかりにとらわれていた私は、生徒に一度も、あのカセットテープの実物を触らせてやることをしなかった。ダビンダしたカセットテープの最後に残る、あの数秒か、数分かの無音の時間のさみしさの意味を共に味わい考え感じ合うことをしてあげられなかった。その歌詞に何の「実感」も与えてあげられなかった私の愚かさを恥じた。カセットテープの音源を青春時代に味わった教師一人の満足だけに、子どもたちの時間が過ぎていってしまった。そのことを、私は今でも苦く思い出すことがある。

2015. 4. vol.79 (2015年4月10日発行/隔月発行)
●発行・印刷/株式会社ミュージック・コーポレーション
〒950-0801 新潟市東区津島屋7-29
TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550
0120-819-395
e-mail odp@eseihon.com / HP http://www.eseihon.com
郵便局口座番号 00530-4-81370 口座名 株式会社ミュージック・コーポレーション

編集後記

ストップもスノータイヤも厚着も鉛色の空とも決別し、時は待望の春。胎動から本格的始動へとギアチェンジ。喜怒哀楽も14年目のスタートを切り新コーナーもお目見え。送料を払ってでも「喜怒哀楽」を読みたいという有り難い読者の方に、より喜びと活力を!と前のめりになりすぎたのか、今号はかなりの文字量に。発刊当初の「喜怒哀楽」の将来イメージは各国、各地にある市場。前号のアンケートの返信は5割弱と少しずつその想いに近づいている気がします。ゆっくりでいい。活気に満ち多くの人や言葉が交流する、そんな紙面を憧憬しています。(木戸敦子)